The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	序論
Author(s)	田中, 均
Citation	a+a 美学研究. 2018, 12, p. 8-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

序論

『a+a美学研究』第十二号の特集は、「シアトロクラシー」という、おそらく多くの人には耳慣れないであろう言葉をめぐる論考によって構成されています。ここでは、この言葉の歴史について簡単に解説することを通して、本特集への導入とします。

「シアトロクラシー」という言葉が哲学の歴史のなかではじめて現れたのは、プラトンの後期対話編『法律』[*1]においてです（プラトンにおける「シアトロクラシー」（テアトロクラティア）について、詳しくは『a+a美学研究』第十号に掲載された拙稿で解説しています）。対話の登場人物である「アテナイからの客人」によれば、かつてのアテナイにおいては、歌舞のあり方が伝承された法によって定められ、観客は沈黙して与えられた歌舞を鑑賞するように強いられましたが、あるとき観客の快だけが判断基準であるとそそのかす詩人が現れたために、観客はもはや沈黙せず騒々しくなり、法をないがしろにし、法に基づいて歌舞の良し悪しを判定する長老たちを無視するようになりました。これを「アテナイからの客人」は、「アリストクラティア」（アリストクラシー）から「テアトロクラティア」（シアトロクラシー）への転換と呼んでいます。つまり、「もっとも善いもの」（アリストン）の支配が「観客席」（テアトロン）の支配に取って代わられたというわけです。重要なのは、歌舞における大衆の反逆である「テアトロクラティア」が、神々・法・年長者の権威一般への反抗へと増幅され、大衆の支配としての「デモクラティア」（デモクラシー）を生み出したと（否定的に）述べていることです。このように、西洋美学史の流れをふまえて、芸術と政治との関係を観客という視点から考えようとするならば、「シアトロクラシー」の語は避けて通ることができません。

この言葉が指し示す問題系は、プラトンから大きく時代を隔てて、ジャン＝ジャック・ルソーに受け継がれました。ルソーは『見せものについてのダランベール氏への手紙』（一七五八年）[*2]のなかで、劇場のなかで現実を忘れ、作り話の演劇を見て感動する孤独な観客のあり方を批判し、それに対して、野外に集った観客たちが互いに自分を見せ合い、「自然な」共同体感情を共有することを提唱しています。このような集団的な祝祭のイメージは、ルソーが『社会契約論』で提起している人民の「一般意志」の概念をいわば可視化するものであり、近代デモクラシーを理論的に基礎づけた思想家というルソーについての通念によく合致していますが、実は、演劇とその観客をめぐるルソーの議論は、デモクラシーの厳しい批判者であったプラトンの議論と非常によく似通っており、このことは一つの問題を私たちに投げかけています。本特集では拙稿がこの問題に直接とりくんでいますが、モーリッツのテクストに即して、「自然」を「教育」することのパラドクスについて論じた梶原将志さんの論考もまた、この問題についての一つの答えを与えるものだと言えるでしょう。

その後、「シアトロクラシー」の概念をとりあげた重要な哲学者としては、フリードリヒ・ニーチェとヴァルター・ベンヤミンが挙げられます。ニーチェは『ヴァーグナーの場合』（一八八八年）[*3]において、プラトンの用法をふまえつつも、独自の意味をこの言葉に込めています。それは、「他の芸術に対する演劇の支配」であり、ニーチェはこれがヴァーグナーの楽劇に見いだされると主張します。そしてここでの「演劇」という言葉もまた独自の意味を持っています。それは「嘘をつく才能」としての俳優術という意味です。ニーチェによれば、ヴァーグナーとは音楽家ではなく「俳優」であり、彼は観客大衆に「効果」を与えて自分を「天才」として崇拝させるために技術を駆使します。音楽の様式性は放棄され、音響、運動、音色といった「原初的なもの」・「感性的なもの」によって観客に「催眠術」・「魔術」がかけられるというのです。このような「シアトロクラシー」批判の背景には、大衆化しつつある社会の「デカダンス」に対するニーチェの批判があり、そのような背景を含めて、ニーチェが展開した主張はアドルノの『ヴァーグナー試論』[*4]（一九五二年）における「ファンタスマゴリー」論へと受け継がれていくことになります。本特集の柿木伸之さんの論文は、この流れをさらに批判的に継承しています。

ニーチェがヴァーグナーを批判するために「シアトロクラシー」の語を用いたのに対して、ベンヤミンはブレヒトの「叙事演劇」を支持するために同じ語を用いました。彼は『叙事演劇とは何か』（第一稿、一九三一年）[*5]において、観客による登場人物への感情移入を促進するような従来の「劇的演劇」（そこにはヴァーグナーの楽劇も含まれます）と、「異化効果」によって感情移入を妨げ、観客の能動的な観察と認識を促進する「叙事演劇」とを対比するときに、「劇的演劇」の観客のあり方を「シアトロクラシー」と呼んでいます。ベンヤミンは「シアトロクラシー」を「反射とセンセーションに基づく大衆の支配」と呼び、ここにはニーチェのヴァーグナー批判の反響を聞

き取ることができますが、ベンヤミンの場合にはマルクス主義的な含意が明確です。彼によれば、「劇的演劇」の観客たちは（「反射とセンセーション」への非理性的な反応を通じて一体化することによって）一つの「公衆」を形成しますが、この「公衆」とは、現実の階級的な利害関係を覆いかくす「偽りの、隠蔽的な全体性」にほかなりません。そして、無自覚的・情動的に形成された存在としての「公衆」は、自ら語るべき言葉を持たず、「演劇の美学」についての専門的な知識を持つと称する批評家によって代弁されてしまいます。これとは対照的に、「叙事演劇」の観客は、「論争、責任ある決断、根拠ある態度決定の試みのうちで細分化」し、「現実の状況に応じた党派性」を持つ「責任感ある集団」になるとベンヤミンは規定しています。ベンヤミンは、このような階級意識に基づいた自覚的な集団形成の可能性を、のちの『複製技術時代の芸術作品』[*6]において、映画の観客のうちに求めていますが、彼の切り詰められた議論を理解することには困難がつきまといます。本特集の海老根剛さんの論考は、ベンヤミンの議論への留保を示しつつ、映画の観客のあり方の可能性について洞察を深めています。

ここまで、「シアトロクラシー」の概念史をたどってきましたが、これをふまえて、現代の論者たちもそれぞれの観点から「シアトロクラシー」を取り上げています。たとえばジャック・ランシエール（『哲学者とその貧者たち』）[*7]は、哲学者と大衆との関係という視点から、また、サミュエル・ウェーバー（『メディウムとしての演劇性』）[*8]は、メディア論の観点から、『法律』の「シアトロクラシー」についてそれぞれ一章を割いて考察をしています。また近年では、本特集にも寄稿されているクリストフ・メンケさん（『芸術の力』ほか）[*9]や、ユリアネ・レーベンティッシュ（『自由の芸術』ほか）[*10]らが、美的なものと自由との関係という観点から、「シアトロクラシー」に注目して議論を展開しています。「シアトロクラシー」をめぐる問いが現代の「参加型」の美術を理解する上でも有効であることは、本特集の石田圭子さんの論考が示しているところです。

本特集のもとになったのは、二〇一七年九月十一日に大阪大学中之島センターで開催されたシンポジウム「シアトロクラシー――観客の美学と政治学」です（このシンポジウムはJSPS科研費26770044の助成を受けたものです）。そのさいに発表されたクリストフ・メンケさん、梶原将志さん、海老根剛さん、柿木伸之さん、石田圭子さん（当日の発表順）に加えて、井上由里子さん、土田耕督さんからも特集への寄稿を得ました。また、特別寄稿として、ボエティウスの音楽論について田之頭一知さんの論考を収録したほか、高安啓介さん、河口篤さん、山下泰春（吉野裕太）さんのエッセイも掲載しております。

本号が、美学の多様な主題について、さらに美学と他の領域とのかかわりについて、あらたな対話をうながす契機となることを願っています。

田中均

註

※以下の註では、入手が比較的容易な日本語訳を中心として文献を挙げています。

*1 | プラトン『法律』（上・下）、森進一他訳、岩波文庫、一九九三年
*2 | ルソー『演劇について　ダランベールへの手紙』、今野一雄訳、岩波文庫、一九七九年
*3 | 『ニーチェ全集』第十四巻、原佑訳、ちくま学芸文庫、一九九四年
*4 | テオドール・W・アドルノ『ヴァーグナー試論』、作品社、二〇一二年
*5 | 『ベンヤミン・コレクション』一、浅井健二郎他訳、ちくま学芸文庫、一九九五年
*6 | 同上および『ベンヤミン・アンソロジー』、山口裕之訳、河出文庫、二〇一一年
*7 | Jacques Rancière, *Le philosophe et se spauvres*, Fayard, 1983.
*8 | Samuel Weber, Theatricality as Medium, Fordham University Press, 2005.
*9 | Christoph Menke, *Die Kraft der Kunst*, Suhrkamp, 2013.
*10 | Juliane Rebentisch, *Die Kunst der Freiheit: Zur Dialektik demokratischer Existenz*, Suhrkamp, 2011.